

作成日	2025 年 6 月 19 日
学科名	生活造形学科

自己評価：S・**A**・B・C

<p>評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み</p> <p>(ア) 質保証の客観性・有効性を高めることを目的として、令和6年度に全学科で実施を依頼した、学生が参画したFDについて、そこで得られた成果・課題について記載してください。</p> <p>(イ) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。</p>
<p>参照資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 過年度のFD実施報告書 ・ 令和6年度点検・評価シート ・ 令和6年度内部質保証推進会議からの提言 ・ 卒業時アンケート（大学） ・ ジェネリックスキル測定テスト ・ 資格取得や進路就職状況 ・ 各種会議の議事録等 ・ その他参照した資料（参）https://www.kyoto-wu.ac.jp/gakubu/faculty/kasei/zoeki/curriculum.html

【現状分析】

(ア) 質保証の客観性・有効性を高めるために、2024年9月～10月の期間、領域やゼミ等に分かれ、学生が話しやすい雰囲気や人数に配慮した学生参画FDを実施した。そこで得られた生活造形学科の教育方法やゼミ指導に対する学生の感想及び期待についての教員間で情報共有し、学生指導に役立てた。

(イ) 昨年度課題として挙げられた1)「知識・理解」の能力向上に関連する授業科目への偏重、2)カリキュラムマップの視覚的わかりやにくさ、を改善すべく「家政学部生活造形学科 教育課程の編成・実施の方針」に基づき、教育課程を体系的に編成し、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーを視覚的にわかりやすく示した。さらに「DP(1)知識・理解」、「DP(2)汎用的スキル」、「DP(3)思考力・判断力」、「DP(4)対話・協調性」「DP(5)主体性」といった5種類の「学位授与の方針に示す能力(DP)」をナンバリングした上で、各科目とDPとの関連を回生ごとに体系的かつ構造的に明示した。

【成果】

(ア) に関しては、各領域内の教員が当該領域学生の卒研内容を共有して相互に助言を行ない、学生の卒研指導に資する情報を得ることができただけでなく、研究方法、指導方法、また昨今の各領域の研究動向等を共有し、各教員の学生指導に役立つ情報を得ることができた。4回生のジェネリックスキルテストの結果から、学生は3年時と比較して、リテラシー、コンピテンシーともに伸長がみられた。卒業生アンケートの満足度（「大変満足している」と「ある程度満足している」の合算値）の推移では、「教授、先生の授業への取り組みに対する熱心さ」、「専門的な知識が身につく授業の多さ」の項目の値は2021年度から継続的に約90%以上である。これらはFDをは

はじめとする取り組みによる教育指導の質の高さが寄与していると考えられる。

(イ)に関しては、大学案内、大学ウェブサイト内[※]、新入生オリエンテーション資料等で公開し、本学での学びの過程の可視化を広く周知することができた。これらの資料により、高校訪問や新入生オリエンテーションにおいて、よりわかりやすい説明を実施し、高校生・学生のカリキュラム構成に対する理解を促進することができるようになった。

【課題】

(ア)に関しては、今年度の4回生の人数が定員を大幅に超えていることと、成績登録日が早期化されたことから、卒研発表会の開催時間が長時間になるため、全教員が全発表に参加できない可能性があり、本FDの効果は若干減じられる可能性がある。その他、ALCS学習行動比較調査結果において、3回生で全大学平均水準に留まる設問内容(「肯定的な意味で批判的に考える力」(思考・判断に関係)、「リーダーシップ」(社会性・自律性に関係)、「明快かつ簡潔に話す力」(対話・相互理解に関係))を向上させる施策については、教員個人の指導・工夫にとどまっている。学生が獲得すべきスキルや態度、授業科目の編成、学生評価の方法等の変更や改善を図ることについては、検討を開始していたが、将来計画を見据えた学科改組という観点から新たな課題が生じている。

【改善・発展方策】

前述の2つの課題を解決するために、卒業研究指導等において各教員が全大学平均水準に留まる3つの項目を向上させるような指導を積極的に行う。その上で、2026年2月にそれら指導に関する学生アンケートを実施する。アンケート結果をもとにポイントを絞って、効果的な教育内容・方法等について教員間で検討を行う。学生が習得すべきスキルや、科目編成等については、学科の将来構想と共に継続して検討する。

自己評価：S・A・B・C

評価項目② カリキュラムの適切性と成果

- (ア)DP、CPに基づき、体系的な履修を促すカリキュラムとなっているか記述してください。
(イ)カリキュラムにおける常勤、非常勤の担当教員のバランスは適正か、記述してください。
(ウ)DPの達成につながる学修成果を得られているか、ジェネリックスキル測定テストや卒業時アンケート結果等を分析・活用して、検証してください。

参照資料

- ・カリキュラムマップ、ツリー
- ・単位修得要領
- ・シラバス
- ・科目群別非常勤教員比率
- ・ジェネリックスキル測定テスト
- ・卒業時アンケート(大学)
- ・その他参照した資料(ALCS学修行動比較調査)

【現状分析】

(ア)学科専門教育としては、生活造形学(造形意匠学、アパレル造形学、空間造形学の3部門)についての広い習熟と、各自が選択し専門とする個別分野における極めて高い達成との両立を目指している。1回生から3回生にかけて、各部門の講義・実習・実験が基礎的な内容から高度な

内容へと順次開講され、3回生後期には3部門のいずれかのゼミに分かれた「生活造形学専門演習」を経て、4回生には「生活造形学卒業研究演習Ⅰ」、「生活造形学卒業研究演習Ⅱ」、そして、それまでの教育・学習の総括として「卒業研究」に取り組む体系となっている。1回生前期には、生活造形学全般の基礎的な知識とアカデミックスキルを身につける演習科目（必修）に加え、3部門の学術的な基礎と概要を学ぶ3種類の講義科目（全て必修）を開講し、3部門を幅広く学び進めていくための基盤を構築する体系的なカリキュラムになっている。学位授与の方針と、配置している授業科目との関連については、単位取得要領内のカリキュラムマップに示してあり、各授業科目の到達目標と、学位授与の方針との関連についてはシラバス内に記載され、学生に対して明示されている。

（イ）非常勤と常勤の比率を確認すると2017年以降に常勤比率は高まり、2024年は73%、ST比は32.9である。しかし、この数値は過去5年間ほぼ一定であることから、学習成果の達成につながる安定した教員バランスだと判断できる。

（ウ）学位授与の方針に即し、また、就業や資格取得に必要な知識とスキルを習得するため、講義科目、演習科目、実習科目を設けている。特に、知識の伝達と定着を主目的とする講義科目では、学生の主体的な学びの支援を意図し、課題や問いかけへの学生の回答に対するフィードバック等を行うオンデマンド式やオンライン式の授業形式を設定している。限られた授業時限数の外でも学習できる授業形式を準備することにより、他科目と同時限のために履修不可能となる科目を減らし、学生の限られた時間を有効活用できるよう配慮している。

他方で、演習と実習の科目においては対面式の授業形態とし、学習効果を得るために少人数にクラス分けしている。また、特に1～2回生においては3部門の科目を履修可能とする意図で、各クラスを異なる曜日/時限に配置している。生活造形学科の演習・実習の特徴は、外部の情報を得て問題意識を持ち、インプットした情報と学生自らの知識と感性を組み合わせアウトプットする点である。アウトプットには根拠と説明の付与が求められ、自他の成果を並列に確認できる開かれた形式である。他学生の前で主張し、批評を受けることを繰り返す中で、「思考力・判断力」、「主体性」、「汎用的スキル」を培うことのできる授業形態としている。2022年度までのカリキュラムマップでは、「知識・理解」の能力向上につながる授業科目への偏重がみられたため、DPの達成につながる学修成果を得るために、2023年度のカリキュラムマップでは、「思考力・判断力」や「主体性」に関わる科目を増やし、該当する授業科目の内容と評価の修正を行った。

【成果】

期待した効果の実現状況を確認した結果を述べる。まず、卒業時アンケートを参考に、身についた能力（どの程度身についたか「よく当てはまる」「ある程度あてはまる」の合算値）を比較する。前年度2023年度との比較では、1項目除きすべての項目で評価が上がっている。「課題解決のための適切な計画を立てる能力」「場を読み、組織を動かす能力」「前向きな考え方、やる気を維持する能力」「主体的に動き、よい行動を習慣づけることができる」の4項目に関しては、前年度比10%以上の増加がみられる。また、過去4年の推移では、2024年度の身についた能力「大学の専門科目で学んだ知識・技能」のスコアが3.5/4.0と最も高くなっている。カリキュラムマップに示す項目から主に「思考力・判断力」や「主体性」に関わる能力の成長が顕われた結果と理解できる。次に、ALCS学修行動比較調査結果の学修経験を参照する。1回生では生活造形学科と全大学

との差はほとんど無いが、3回生では、特に「課題発表の機会」「授業内容に刺激されて自主的に新たな勉強や探求をしたこと」、「思いどおりに学業ができている実感」の3項目において、全大学よりも平均スコアが顕著に高いことが把握された。3回生の成長実感について、生活造形学科と全大学を比較すると、「特定の専門分野に関する理解力」「プレゼンテーションを準備し発表する力」「ものごとの本質をみて判断しようとする力」平均スコアが顕著に高く、また1回生との比較においても、スコアは顕著に高まっていることがわかる。このことは生活造形学科の「思考力・判断力」「主体性」に関わる授業が高いレベルで実施されていることを示している。

また、3回生の学生の意欲について、生活造形学科と全大学を比較すると、特に「専門分野の内容を十分に学ぶ」、「幅広い知識、教養を身につけ視野を広げる」、「起業やその意識形成にかかわる学びをする」、「討論やプレゼンの訓練になり課題解決をしていくような授業を受ける」の各項目の平均スコアが顕著に高く、また1回生との比較においても、スコアは顕著に高まっていることがわかる。これは「知識・理解」、「汎用的スキル」、「対話・協調性」に関わる経験に対する意欲が高められた結果と理解できる。

さらにジェネリックスキルテスト（4回生）では「リテラシー、コンピテンシーとも、全国学生平均を上回っている。リテラシーの判定レベル7段階では入学時(5.33)、3回生(5.56)、卒業時(5.69)、コンピテンシーの判定レベル7段階では、入学時(2.91)、3回生(3.16)、卒業時(3.47)と段階的に上昇している。コンピテンシーの内訳を確認すると、統率力と自信創出力は0.5~1.2程度の伸長度が見られる。このことは教育カリキュラムが有効に機能していることを示している。このようにDPの達成につながる学修成果により、生活造形学科のカリキュラムの適切性と成果が確認できた。

【課題】

ALCS 学習行動比較調査結果の学修経験において、3回生で全大学平均水準を下回る設問内容「授業内での学生間のディスカッション」については、1回生では生活造形学科と全大学との差はほとんど無いが、3回生になるとマイナスになっている。

卒業生アンケートの身についたスキルのうち「当てはまらない」「全く当てはまらない」の合算値は「数理的思考力とデータ分析・活用能力（数理・データサイエンス、情報科学など）」「外国語を使う能力」という2項目は50%を超えていた。同アンケートの満足度のうち「満足していない」と「あまり満足していない」の合算値は、「外国人留学生との交流が盛んである」「卒業生との交流が盛んである」「他の学校の学生との交流が盛んである」の3項目は30%を上回っている。

【改善・発展方策】

家政学部の改組に伴い生活造形学科では、多様な分野でサステナブルな未来を共創するための知識とスキル（形式知と暗黙知）を備える人材を育成する。そのために、これまで培ってきた教育カリキュラムをさらに発展させ、分野を横断的につなぐ社会イノベーションを支える専門科目を新設する。特に新設する課題解決型のプロジェクト科目では「授業内での学生間のディスカッション」を積極的に組み入れる。また、地域や学年を超えた「交流」の機会を設けることによって、アンケート結果で満足していないと評価された「交流」について、留学生・卒業生・他大学の学生という枠にとらわれずに全体として補完する。

評価項目③ 成績評価

- (ア)成績分布は、教員間で評価のバラつきが生じていないか。また、学科において検証・調整されているか記載してください。
- (イ)成績評価、フィードバック等がシラバスに基づき適切に実施されているか、学修行動調査やALCS学修行動比較調査等の結果（評価の公平性の学生満足度）から検証し、記載してください。

参照資料

- ・各科目の成績分布
- ・学修行動調査の成績評価に関する設問
- ・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）の「69.評価のされ方」満足度結果

【現状分析】

(ア) 2024年度学修行動比較調査の独自設問「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」の結果から、科目によりばらついているとの回答が22%存在する。生活造形学科の各担当教員の各科目の成績分布の状況を確認した。生活造形学科の専門科目の全体的な傾向として、A判定の度数が最も高く正規分布に近い状態がほとんどである。しかし、SS判定・S判定が半数程度を占めているケースや、B判定・C判定が3割から4割程度を占めているケースといった、やや歪な分布状態が極めて軽微ながら見られた。3種類の部門の科目全体の成績分布傾向をみると、アパレル造形学と造形意匠学はA判定の度数が最も高い正規分布に近い状態であるが、空間造形学はB判定の度数が最も高い分布になっている。このように、成績評価傾向には部門間でやや違いがあることがわかる。むろん、各授業科目の達成目標や履修者の状態等の事情により、個々には様々な要因があり得るが、科目により成績評価がばらついているとの学生の回答の一因になっている可能性はある。なお、複数の教員がクラスを分担して開講する形式の科目は教員間で成績評点を調整し、クラス間で成績の水準が異なることが無いようにしている。卒業研究の評価においては、卒業研究発表会後に学科全教員が集まり協議の上で評価並びに卒業判定を行なっている。また、2024年度には卒業研究指導の質を確保するために、卒業論文の必須項目を設け、チェックリストを作成し、論文提出時に学生並びに教員で確認するように改善した。

(イ) 成績評価と単位認定の方法はシラバスに適切に記載され、適正な手続きに沿って認定されている。成績評価に不服がある場合の手続きは学生へ明示されており、各期末の成績開示の案内に併せて掲示される。2024年度学修行動比較調査の独自設問「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」の結果からは、適正に評価されているとの回答は約58%である。どの学年でも50~60%と安定している。自己評価より評価が高い/低い、学年全体で約5%/約4%である。また、ALCS学修行動比較調査の満足度における「学んだ成果に対する評価のされ方」の項目では、どの年度も安定して、1回生3回生ともに少し満足と満足の間のスコアである。以上により、公正な成績評価は安定的かつ促進されている状態である。

【成果】

2024年度学修行動比較調査の独自設問「あなたが受けた授業の成績評価は適正だと感じていますか」の結果により、成果を確認する。「科目によりばらついている」との回答22%という数値は、前年度の30%弱という数値と比較すると減少し、科目によるばらつきは改善の傾向を示している。「適正に評価されている」との回答は約58%という数値は、前年度の37%程度と比較すると上昇している。学年全体の「自己評価より評価が高い/低い」を昨年度と比較すると、それぞれ約11%、

約 1%の減少が見られる。以上により、公正な成績評価が促進されている。

【課題】

各授業科目の達成目標や履修者の状態等の事情がある中で、SS判定・S判定が半数程度を占めているケースや、B判定・C判定が3割から4割程度を占めているケース、3部門の成績評価傾向の違いなどをどのように一般化すべきかが課題である。

【改善・発展方策】

2025年度末までの学科会議において、昨年度末に作成した卒業研究等のルーブリック基準について見直しを行うと共に、今後ルーブリック評価を導入する科目を選定し、ルーブリック基準の検討を開始する。また、成績評価に関する学生の調査結果と各担当教員の各科目の成績分布についての情報を学科内で共有する。希望する教員には本人が担当する科目の成績分布結果を個別に提供する。